写真人とその本　8　／新川幸信

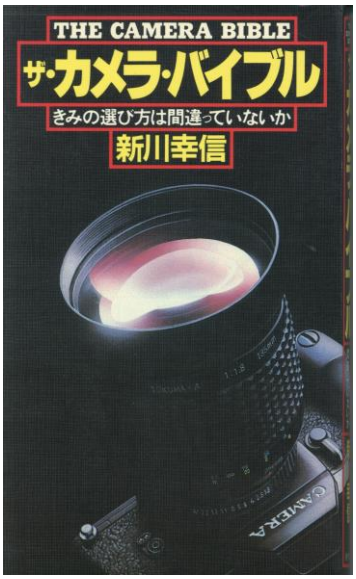
日本カメラ博物館 JCII ライブラリー
学芸員　宮﨑真二

新川幸信（しんかわゆきのぶ）（1931-1986）は、東京大学経済学部、東京写真大学短期大学部（現：東京工芸大学芸術学部）卒業後、業界紙のカメラタイムズを経てフリーのメカニズムライターとなりました。1960 年に開催された第 1 回カメラショウの取材を手伝ったことで、カメラ毎日編集部の佐伯嘉昭（本名：恪五郎）とつながりができます。以降ライターと編集者という立場で共に仕事を行い、緻密な論理展開で同誌のメカニズム、撮影技術記事をリードしました。

『よい写真へのアドバイス』

『カメラ毎日』でのおもな記事としては、1966 年 1 月号から 1968 年 3 月号まで連載された「よい写真へのアドバイス」があります。同記事は連載終了後に臨時増刊としてまとめられ、これが新川の初著書となりました。同様の企画として、1973 年 7 月号から 1974 年 10 月号まで「新版・よい写真へのアドバイス」が連載され、1975 年 4 月に別冊として発行されました。さらには 1979 年 1 月号から 1981 年 1 月号まで「TEM 時代のよい写真へのアドバイス」が連載され、1981 年 5 月に別冊として発行されました。

その後は『日本カメラ』を主軸として活動しました。同誌では、1983 年 1 月号から 1986 年 11 月号まで「テストレポート」に携わっていたほか、『カメラ年鑑』の一眼レフ部門を担当していました。



『ザ・カメラ・バイブル』

1984 年には、『ザ・カメラ・バイブル』（徳間書店）を著しました。同書はカメラを選ぶためのガイドブックとして、35 ミリカメラ 94 機種について機能別に分類し、各機種のセールスポイントチェックと問題点、今後の課題について説いています。また「カメラと深くつきあう方法」として、カメラを選ぶ前の予備知識となる、現代のカメラの概況をできるだけ平易に解説しています。そのほか「カメラ装備の総点検」として、アクセサリーや手入れ方法、選択と購入以降の事柄についてもアドバイスを行うなど、多岐に渡った内容でした。

1960 年代から 80 年代にかけては、一眼レフを中心としてカメラ機構の自動化、電子化が急速に進むとともに、究極的な目標ともいえる「オートフォーカス」の実用化が成し遂げられたメカニズム激動の時代でした。新川の著書や連載からは、新しいカメラメカニズムから生まれる新しい写真表現の可能性を模索していたことが見えてきます。